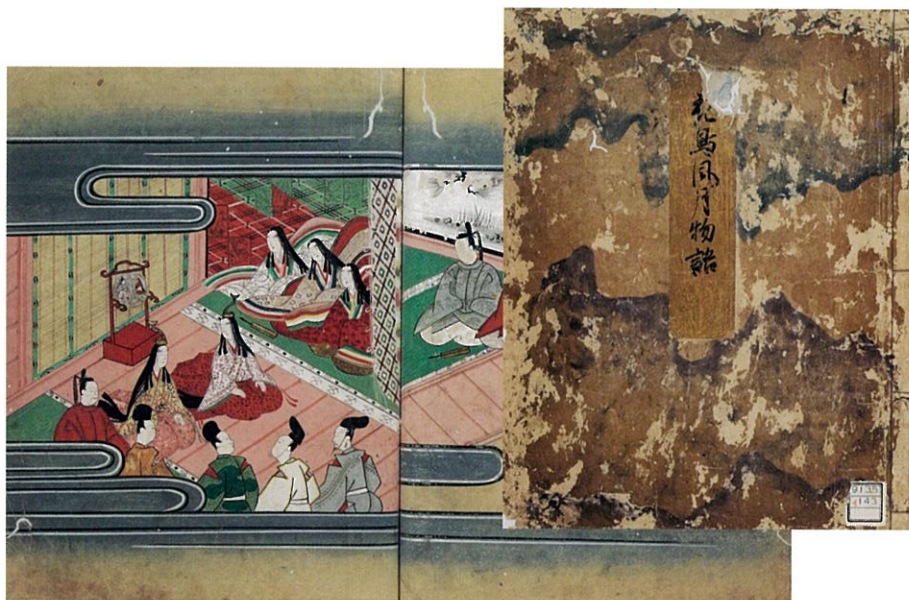


やまとの名品 天理図書館

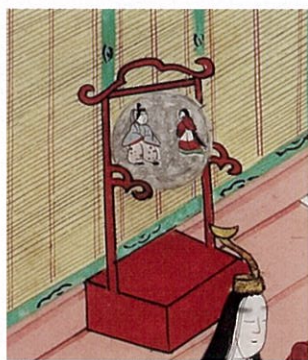


かちょうふうげつものがたり
花鳥風月物語

室町末期写 1冊
縦32cm 横25cm

室町時代から江戸時代初期にかけて作られた四百種余りの短編の物語草子類は、御伽草子と総称される。今も昔話として親しまれている『一寸法師』や『浦島太郎』ほか、公家達の恋愛物語、神仏への信仰、動物・植物が主人公の話など、多種多様な作品が残されており、掲出の『花鳥風月物語』もその中の一つ。『花鳥風月物語』は、御伽草子の中では異色の作品で、物語というよりも、当時の古典教養の中心であった『伊勢物語』と『源氏物語』の学習書に近い。その内容は、萩原院（花園天皇、文保二年（一一三一）讓位）の御代、葉室中納言邸扇合での事。

山科少将が出した扇の男女の絵の男性が、在原業平か光源氏かとの言い争いとなり、花鳥・風月という巫女姉妹を招き口寄せ占いをさせる事となる。まず、業平説の人々が占わせると、花鳥が業平の霊を呼び、風月が間い手となって『伊勢物語』に登場する女性たちの素性が語られる。次に、源氏説の人々が占わせると、神鏡に源氏の姿が現れ、花鳥が源氏に代わって生涯を語り出す。やがて風月に末摘花の霊が乗り移ると、鏡には扇絵の女性が映し出されて、源氏（花鳥）と末摘花（風月）が問答する。絵の人物は源氏であった。かくして扇絵の謎は解け、巫女



姉妹は褒美を賜り退出するといふもの。

掲出書は室町時代末期頃の書写と思われる大型で古風な趣のある奈良絵本の伝本。奈良絵本は室町時代後期から江戸時代中期にかけて制作された彩色の絵入り写本。御伽草子を中心にさまざまな分野の作品が伝えられている。

（天理図書館 瀬川浩子）